

4 日目(12月9日):日本のNGO

今日はピースボート、グリーン・アクション、アイフォーム(IFOAM)、「MOX 反対伊方の会」といった NGO の人たちとの会合があった。さらに、前回の訪問で知り合った環境政策エネルギー研究所所長の飯田哲也教授にも会った。伊方原発に反対する活動家の阿部純子さん、ピースボートの吉岡達也さんやメリー・ジョイスさんとも今までの訪問で知り合っていた。グリーン・アクションのアイリーン・美緒子・スミスさんとは昨日のシンポジウムで出会った。郡山昌也さんは緑の党党员で以前から知っている。今回も金曜日に会う予定である。村山勝茂さんはその郡山さんの後任である。

NGO の構造は全く違う。

阿部純子さんは地域の反原発のために戦っているが、仲間は少なく、財源もない。小さな住民運動のグループは伊方原発の再稼働に対して戦っている。この原発は MOX 燃料を用いており、次に再稼働が予定されている。大飯原発の 2 基が定期点検のために停止されたあと、日本は稼働している原発は再びゼロになった。安倍首相を苛立たせる状況だ。彼は原発を諦めるつもりはない。定期点検後の原発再稼働について県や地方自治体との合意は福島以後ますます困難になっている。とくに、原発が稼働していないときには、「MOX 反対伊方の会」は地域にいる人たちに原発に対する態度を匿名で尋ねることを始めた。その結果を政府に手渡すつもりだ。

全く違った動きをしているのがグリーン・アクションだ。日本全国に広がるこの運動グループは、国際的なネットワークとオルタナティブなコンセプトに重点を置いている。代表のアイリーン・美緒子・スミスは 1970 年代から日本で環境運動を担っている。当時、水銀中毒によって引き起こされた水俣病を明らかにすることに大きく貢献した。この運動グループは、とくに MOX 燃料、青森の核燃料処理工場、高速増殖炉もんじゅに反対していたが、現在は福島と福島の状況の悪化をどうすれば防げるかが主要テーマである。アイリーン・スミスはエネルギー効率も前進させようとしている。彼女は地方自治体でのエネルギー削減の可能性をテーマにした市町村会議を 12 月 15 日に開催する。住民たちの電力削減への意志は十分にあり、実際 2011 年東京では 15%、2012 年にはさらに 10%の節約が行われていると彼女は指摘する。25%(!)という数字に驚いて尋ねなおしたところ、節約は主に政府の経済界に対する緊急の要請によるものであったことがわかった。私はこの数値には少し疑問を持っている。私の知っているかぎりでは 2012 年の節約は減少している。

ピースボートは国際的なチームを抱えた組織である。彼らは変わったコンセプトを持っているが、それは“ピースボート”という名前の船を所有しており、紛争地域への旅の間に平和教育を提供している。反原発プログラムも活動の一つに数えられている。

アイフォーム(IFOAM)は、今回会った NGO の中で唯一国際的組織に属しており、そのテーマは有機農業である。村山氏は「放射線と食品」を組織の活動テーマに入れようとしている。「原発は私たちの食材を破壊する」というキャンペーンが日本社会を動かすことができないか、このようなキャンペーンがすべての NGO によって支持されることができないか、私たちは長時間議論した。しかしそれぞれの NGO の構造や重点が違いすぎるために、共通のキャンペーンで協力することができないことが明らかになった。

日本で脱原発を目指して活動している勢力(それが少なすぎるのだが)を一つにまとめることは基本的な問題のように見える。(ほとんど)誰もが互いに知っているけれども、自分たちのプロジェクトだけに力を注いでいる。

政府からいろいろな委員会や審議会の委員として招聘された飯田哲也氏と、再生可能エネルギー法に優先的買取りが欠落している問題について、もう一度議論した。同氏は私の間違いを正した。つまり、買取りの優先はあるというのだ。ただしそれは例外で、解釈次第であり、拡大することもできると言う。太陽光発電装置の設営は増えていると彼は言う。ここで優先的買取りが機能しているという。法政大学で私が聞いた再生可能エネルギー設備の民間出資金が7%という数値は、飯田氏は疑っている。統計データはないが、この数値は高すぎると彼は言う。

これらの交流は私たち全員にとって実り豊かなものであった。もちろんドイツでの経験についても多くの関心が集まった。日本の反原発運動に迫力が欠けている問題を解決するのは簡単ではないだろう。

その後、市川房枝記念会女性と政治センターの久保公子さんと長いインタビュー。彼女の質問は脱原発における緑の党の役割と緑の党における女性の役割だった。